

## ボードレールの「現代の公衆と写真」をめぐって—フランス第二帝政期の美術行政と写真

打林 俊（日本大学）

シャルル・ボードレールが1859年に『ルヴュ・フランセーズ』に四回にわたって連載したサロン評の第一回目の二章目にあたる「現代の公衆と写真」については、様々な視点から考察が行われてきた。近年の研究では、海老根龍介や荻野哉が、ボードレールの美学観の中で、この写真論の位置づけを論じたことが注目される。しかし、その中でも明確に言及されていないながらも、考察の過程で重視されていない問題がある。それは、ボードレール自身は明言していないものの、彼の心中で対象とされているのが「サロンにおける写真展」などではなく、同一会場内で開催されていた、民間の団体であるフランス写真協会の第三回展覧会であるという事実である。写真史研究では、このフランス写真協会展第三回展がサロンと同一会場で、会期を合わせるかたちで開催されるまでの経緯について、ポール＝ルイ・ルベールが詳細な史的検証を行っているものの、ボードレールの写真論については踏み込まれていない。

つまり、ボードレール研究の立場からみれば、「現代の公衆と写真」は同サロン評全体に通底する、「想像力」対リアリズムという対立図式の中で一定の解釈を与え得るものであり、写真史研究の立場から見れば、第三回フランス写真協会展を、美術行政との攻防の中で読み解くことしか行なっていなかったといえる。事実、ボードレールが展開した論を、フランス第二帝政期前半における美術行政と写真をめぐる攻防という視点の中で見てみると、そこに目新しい意見はまったく提示されておらず、一見、内容自体にそれ以上の発展性を見出すには困難を伴う。

だが、この視点に立つと、一つの疑問が生じてくる。それは、ボードレールがサロンとは実質的に関係のない展覧会を念頭に置き、もはや通説とすらなっていた写真批判を、なぜサロン評に発表したのかという、発表の場をめぐりものである。というのも、同論がサロン評に発表されたことを発端に、1860年代以降、サロンに写真部門が設けられたかのような拡大解釈や誤解が生じていくという、論調とは真逆の作用が垣間見えるからである。発表者は、なぜボードレールが、さもサロンの写真部門であるかのように著すという事態が起り得たのかを問題として考察を進めることとする。まずは、第三回フランス写真協会展がサロンと併設開催されるまでの経緯を仔細に検証することとしたい。次いで、当時のフランスの美術界における写真を取りまく環境と、ボードレールの論調の同時代性を検証する。そして、芸術への昇華を望む写真を批判していたボードレールこそが、サロン評上に写真論を発表したことによって、写真の社会的立場を強めるというパラドックスを招く原因となったことを指摘する。